

たった一人の反乱

丸谷才一



たった一人の反乱

丸谷才一

講談社

たった一人の反乱

昭和四十七年四月二十日 第一刷発行
昭和五十一年十一月二十八日 第三十三刷発行
著者 丸谷才一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一〇二
電話東京(〇三)九四五―二二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

© 丸谷才一 一九七二 Printed in Japan



定価はカバーに表示してあります。(文1)

たった一人の反乱

装幀 原 弘
原画 アンтониオ・ロペス
写真 野上 透

男前のせいで惚れられるとか、顔はともかく気性が嬉しいとか、それともいっそ一押し二押し三押しとかなら様になるけれど、ひい爺さんのおかげで若い娘に気に入られるというのは奇妙な話だった。しかしユカリがぼくに関心を示したのは、どうも曾祖父のことからであったような気がしてならない。三代前の先祖、馬淵重吉の話をするまでは、ただ小栗の顔を立てて初対面のぼくに如才なくしている感じだったのに、それ以後すっかり打ち解けてきたのである。もちろんこれは受取り方の問題かもしれないけれど、しかしたとえばぼくたちが小栗とマヨに別れて夜ふけに乗ったタクシーで、彼女が最初に選んだ話題も曾祖父のことであった。

バックシートの薄くらがりで、ユカリは酔いのせいかな、それとも酔ったふりをしてなのか、ぼくに寄りかかっていた。そのあたたくて柔かな肢体の感触はなかなかいいし、ぼくの口のあたりにはちょうどユカリの大きな耳かざりがゆらゆら揺れていて、ときどき唇に触れる。ぼくは唇がそっと刺戟されるたびに、風変りな桃いろのビニールの形をあざやかに思い浮べ、それから女の耳を思い浮べ、何かささやかなければいけないような気がしてこう言った。

「今夜はとても楽しかった」

これが陳腐な台詞であることは言うまでもないし、それを受けてユカリが、
「あたしも……」

と答えたのも平凡である。いや、そのときぼくが右手を動かそうとすると、それがユカリの左手に軽く触れ、どうしようか、と一瞬ぼくが迷ってから思い切つてその小さな手を握りしめようとしたとき、すばやく向うのほうからその手を任せてきて、女の指の細さとかすかに汗ばんだ掌とが中年者を有頂天にしたことにしても、月並な進行ぶりと言えないことはない。しかしユカリがそれにつづけて、

「お話、とてもおもしろかったわ。ひいお爺様のお話」

とつぶやいたのは、女が男に闇のなかで手を握らせながら口にするにしては、場所柄をわきまえない異色の発言であつた。

けれども、その台詞がおかしいというのはあとで考えたことで、言われたそのときは何しろ興奮しているから氣にとめない。むしろぼくは、

「ほう、それはよかった」

と答えながら、ほのかな闇をとおしてユカリの白い顔をみつめ、華奢な手の味わいを念入りに楽しんでいたのだが、すると彼女はあえぐようにして、

「ええ、殊に金時計のお話、すてき……」

とささやいたのだ。それはまるで、その「すてき」な逸話の主人公がぼくであるみたいな口調だつたけれども、そのときぼくは自分の話術を褒められただけのように感じていたらしい。それとも、この若い娘はこういう場合にふさわしい話題の選び方を知らないほど、それくらい見かけによらず純真なのだと思つていたのだろうか。

曾祖父の金時計の話は、よくが旧制の大学生のころ、夏休みに帰郷した際に郷土史家から聞いたものである。昔、商業学校で地歴の教師をしていたこの老人は、川添いの道を散歩しているばくを呼びとめて氷水をおごってくれ、曾祖父がどんなに偉かったかは妾に対する態度でもよく判ると前置きしてから、彼のいわゆる「秘話」を聞かせてくれたのだ。それによると、馬淵重吉は土地の名妓を引かせて困っていたが、この絶世の美女が結核になった。ところが彼女は時計が読めないくせに金時計が好きで、もつと正確に言うのと、旦那が金の懷中時計の蓋をばちんとあけるときの音を聞くのが大好きである。それで彼は暇さえあれば妾の病間に坐って時計の蓋をばちんばちんと鳴らしてやったが、あまりしょっちゅうなので蓋のバネが駄目になる。すると東京なり大阪なりからまた新しい金時計を買い入れて、ばちんばちんと鳴らす。一年か二年ののち、妾が死んだときには、その枕もとに蓋のこわれた金時計が十二も並んでいた。

「いいかね、英介さん」

と郷土史家はここで眼をうるませて、何しろ明治十年か二十年のことだからもちろんスイス製で（「おそらくゼニットでしょうな」、値段は途方もなく高い。それを十二箇とは何と豪勢な、しかも病人に対してじつに心の優しい、惻々^{こくそく}と胸を打つ話ではありませんか、さすがは地方実業界の先駆者、馬淵重吉、立派なものですなあと感に堪えた表情で語ったのだ。

よくには正直のところ、蓋のバネ仕掛けのこわれた金時計が一ダースも残るといのが呑みこめなかった。駄目になったのを下取りに出して新品を買うことをなせなかったのか、どうも納得がゆかなかったのである。しかしそんなことを訊ねるのは何となく品がないような、明治中期北陸政財界の大物の曾孫にふさわしくないような気がして控えたため、かえってそれが気にかかって、この美談には感動しそねた。だから、よくとしてはむしろ笑い話のつもりで披露したの

に、微笑したのは小栗だけで、ユカリとマヨとは異口同音に、

「まあ！」

などと感嘆し、何かロマンチックな、抒情的な表情にさえなっている。すっかり勝手が違つて、ぼくは内心当惑しながら、つまり女というのはこれほどものを買ってもらうのが好きなのか、それとも、ファッション・モデルなんてこのくらいユーモアの感覚が乏しいのか、と考へていた。モデルたちと酒を飲むのはおろか、口をきくことすら、はじめての体験だったのである。

そういう人間が、夕食にはじまつて一晩、彼女らと梯子酒をする羽目になったのは小栗のせいである。これは旧制高校のときの同級生で、当時の彼は、サッカーの上手な、気のいい大男であつた。不仲ではなかつたけれど、特に親しくつきあつたわけでもない。大学生の時分にも、二、三度、金を借りがてら遊びに来て将棋を指したことがあるだけのように思う。彼は文学部の社会科学に進んで、新制高校の社会科学の教師からある出版社の編集部にはいり、ここが倒産すると推理小説の下訳（やがて一本立ちになつたけれど）、娯楽雑誌の黄色ページ、ディスク・ジョッキーの台本など、ジャーナリズムの下積みの仕事でずつと暮しを立てていた。それが数年前、ビール会社で出している宣伝雑誌の編集部に迎えられる、間もなく上役が飛行機事故で死んだため、課長待遇の編集長に昇格した。小栗もこれでようやく生活が安定したらしいというのは、当時、これも同級生である新聞記者から聞いた噂であつた。ぼくが今の会社にはいつて挨拶状を出すと、すぐに電話がかかつてきて、そのうちいっしょに飲もうなどと約束したのだが、こういう相談のおきまり通りそのまま会わずじまいになつていた。

この日ぼくがビール会社へ行つたのは仕事のためで、オーブン・ケースを大量に注文するらしいという耳よりな話があつたので、瀬踏みに出かけたのである。本当のことを言えばこういうの

は企画部長の仕事ではないが、営業にこの情報を伝えると、そちらで一つ当ってみてくれないかという返事だった。企業には官庁のような縄張り根性はない、と言えは聞えはいけれど、実なるべくよその部門に仕事を押しつけ、自分は怠けようとする。そのへんの事情はかねがね判っていたので（はじめはずいぶん驚いたものだった）、ああ、またあれかと考えて、自分でゆくことにしたので。相手が小栗の勤めさきだということはかすかに意識したもの、宣伝雑誌の編集をやっている男の口ききで商談をまとめようとは思わないし、有力な筋の紹介状があるし、それに何よりうちの社のオープン・ケースなら、出来そのものより値段の安さで有無を言わせぬ自信があった。

販売促進部長に会おうとしてエレベーターに乗ると、閉りかけたドアへ大男が大変な勢いで突進して来たので、あわててボタンをいくつか押した。はいつて来た大男はぼくの前に立って、

「何だ、君か」

とぶっきらぼうにつぶやき、礼も言わずに微笑したのである。ほほえんだ途端、急に顔が若々しくなり、二十年近くの距離が失せる。

「こっちこそ、そう言いたいくらいだよ」

二人が笑い声を立てて、二こと三こと話をしているうちに、エレベーターは販売促進部のある三階に着く。彼はその部屋の前までついて来てくれて、別れるとき、帰りにちょっと寄らないかと誘ったのだ。ぼくが承知したことは言うまでもない。

オープン・ケースについての大口の商談が有望だと判って引上げたのは、それから一時間ほどあとである。ちょうど五時で、宣伝部の者はぼつぼつ帰りかけている。ぼくは、手をあげてひらきさせている小栗のそばへ、

「おや、編集長だけじゃないか」

と言いながら寄って行った。デスクが五つ並んでいる一区劃には彼しかいなかったのである。そのとき、通産省の日ぐれどきの情景がちらと心をかすめた。五時になるとノン・キャリアの連中が「脱兎のごとく」引上げ（これは何につけても一こと多いため次官になれそうもない——そしてやはりなれなかった——ある局長の言葉である）、キャリアの（つまり国家公務員の上級職試験に合格した）事務官だけが居残ることになるあの官庁とそっくりだと思つて、郷愁めいたものを感じたのだ。

しかし小栗は、

「うん、昨日が校了でね」

と説明した。万事かたづいたのが夜の一時すぎで、それから彼がウィスキーをあずけている店へ連れ立って出かけたのだが、したたか酔ったあげく、今月はごたごたつづきで御苦労だったから明日は全員休暇を取れ、おれが出勤して仕事はみんな引受けると見得を切った。仕方がないから、頭が割れそうな二日酔いなものにほぼ定刻に出社し、午前中は何とか持ちこたえたけれども、昼休みになると待ち兼ねたように近所のレストランで迎え酒をしてから、医務室へ行つて診察を受けた。医者はいつものことなので心得ていて、ビタミンか何か注射してくれ、すこし横になるほうがいいとにやにやしながらすすめる。医務室の細いベッドで一時間たらず眠り、ようやく元気が出たのだが、それからついさっきまで、雑務の連続で大変だった、と小栗は早口にまくし立てて、

「どうだい？ 改めて迎い酒をやるうと思うんだが」

「いいね。非常にいい」

とぼくは答えた。かねての約束も果せるし、宣伝雑誌のことにくわも詳しくなれると考えたのである。ぼくの勤めている家庭電機会社では社外に委託して箸にもかからぬ詰らぬ雑誌を出しているのだ、そのうち何とかしなければとかねがね思っていたのだ。

しかしぼくが上機嫌で賛成したとき、小栗は、

「そうそう」

とつぶやきながら居ずまいを正し、打って変ったしかつめ鹿爪らしい表情で言った。

「実はこのあいだ……」

彼の言葉はそこで途切れた。戸口から派手な調子で、

「小栗さーん！」

と呼びかける若い女の声があったからである。視線をあげた編集長の顔は、もっともらしくて神妙な感じから晴れやかで軽薄な喜びの表情へ、まるで高速度撮影の映画のように移ってゆく。彼は陽気な声で言った。

「よう、マヨ、どうした」

思わず振り返ると、真赤なスーツを着た大柄な娘が、彼女の声に驚いて顔をあげた宣伝部員たちの視線を集めながら、ほとんど小走りに近づいて来る。それはポケットや襟を白く太く縁どったスーツで、全体の印象はまるで宇宙服のようである。そのうしろから草いろの絹のワンピースの娘が、同じ色の絹のスカーフをなびかせてついて来るが、二人ともなかなかの美人で、凝ったなりをしていることも、ハンドバッグのほかに小さなトランクを持っていることも共通している。

「ねえ、おなががすいちゃって」

とマヨは小栗のそばに立って言った。

「朝の九時から今まで、あたしが十体、ユカリちゃんが十体、撮ったの。二人とも朝ごはんぬきでしょ。それなのに口に入れたのは、牛乳二本だけじゃない」

「よしよし」

と小栗はうなずいて、

「それじゃあラーメンでも……」

「あら、ラーメンなんて、ねえ」

とマヨは、もう一人の娘と顔を見合せて笑い声を立てた。

「ラーメン一杯を二人で分けるくらいにしたほうが美容にいいんじゃないか」

と小栗はとぼけた顔で、

「マヨ、お前また肥ったようだぞ。この調子で育ってゆけば、もうすぐミュージック・ホールから声がかかる」

「いやねえ、小栗さんたら。いつも同じ冗談ばかり」

編集長は、その批評は無視してぼくを指さし、

「この人は昔の同級生でね。こないだまでは通産官僚。今は……名刺出せよ」

そしてぼくに、

「二人ともファッション・モデル。こっちの大きいほうは宮沢マヨさん。ビールびんが日本一、日本一でもないか、まあとにかく似合う美人。こちらは野々宮ユカリさん。この人はうちの雑誌にはまだ出てもらってないけど」

と紹介する。マヨは、

「あら、ユカリちゃんだつてずいぶんタッパが高いじゃない」

とつぶやいてから、急にしとやかに、

「宮沢と申します」

と挨拶して、小さな名刺を出した。それはモデル・クラブの作ってくれたものらしく、ユカリが渡したのも同じ型である。

「小栗はこういう美人たちと知りあいなのか。ずいぶんうまい商売もあるものだな」

とぼくがお世辞を言うと、彼は、

「両手に花」

と陳腐なことをつぶやいた。そして、相変らず立ったままのマヨと、名刺を差出してからあいっている椅子に腰をおろし、氣取った手つきでスカーフをいじっているユカリとに、ちょうどこれから馬淵と出かけようとしているところだからいっしょにどうだと誘う。もちろん彼女らは反対しないし、ぼくもこの提案を喜んだ。はいつて来たときから、ユカリの可憐な顔立ちが気に入っていたのである。

それは整った感じの、くっきりした目鼻立ちだが、肌が白いためか、まるである種の写真のようにぼうっと煙っていて険がない。ぼくは、これはまるで林檎の花かそれとも梨の花に似ていると思ったり、みどりの服のせい草花のようだと思ったり、それからふと、何となく稀代の淫婦という気がしないでもないと考えたりして、その大時代な形容に自分で呆れていた。ただしユカリの顔に惹かれたとはいえ、別にこの女をどうしようとはっきり考えたわけではなく、旧友との交歓にいつそう興を添えることになったと軽い気持で喜んだにすぎないけれども。

酒を飲むときはたいいそうなのだが、運転して来た自動車は駐車場にあずけたままでゆくことにした。それを聞いて小栗は、人影がまばらになった宣伝部を出ながら、いかにも役人らしい

実直さだとからかったし、娘たちもくすくす笑う。たしかにあれは滑稽だったろうと思う。役人うんぬんはともかく、こういう用心深さは、二人の美女といっしょに食事をするという時と場合にふさわしくないのである。

タクシーでは前の席にすばやく小栗が乗り、バックシートにはぼくをはさんで右にマヨ、左にユカリが腰かけたし、最初に行ったビフテキの店でも、小栗とマヨ、ユカリとぼくが並ぶことになる。主人役の小栗が上手に座を取持ち、ぼくとユカリを親しくさせようと気を使うのは判ったし、ぼくにしても無愛想にしていたわけではないけれど、草いろの服の娘は通りいっぺんの社交的ないし儀礼的な態度にすぎなかった。

デザートのメロンを食べ終ると、ユカリはマヨにさりげなく目くばせして立ちあがる。男だけになったところで、ぼくは小栗に早速、さっきから気がかりだったことを訊ねた。

「おい、マヨという子は君と……関係があるのかい？」

「マヨだけじゃない、ユカリのほうだって……と言いたところだが、残念ながらどちらともまったく無関係。商売ものには手を出さない主義でしてね」

「ほう、堅いことを言うじゃないか」

「そういうものですよ、世の中は」

と言って小栗は笑ったけれども、その笑い顔がとっぜんかすかにゆがむと、またさっきと同じ鹿爪らしい表情になって、

「細君が亡くなったそうじゃないか」

「うん」

とぼくは答えた。通産省に勤めてしばらくしたころ、ある局長の世話で結婚したのだが、その

妻が一年ほどわずらったあげく死んだのはこの二月のことなのである。

「それはどうも」

と小栗は頭を下げて、そのさきは口のなかで何か言ってから、

「もうどのくらい経つ？」

「三月になるな」

「いろいろ大変でしょう」

「そうですね。しかし子供がいなから助かる。それに……」

などとぼくが家庭のことをあれこれ説明すると、編集長はうなずいたり、問い返したりしたあげくつぶやいた。

「なるほど、人間万事塞翁さいおうの馬だね」

ぼくはこれを聞いてみように感動していた。諺ことわざや故事成句を、本来の使い方とはほんのすこしずれた（しかし正しいと言ひ張れば言ひ張れないこともない）感じで使うのは、高等学校のころの彼の癖で、みんなでよく笑ったものだった。そして、一方ではぼくが学生から役人になり、会社員になり、小栗は学生からさまざまな職業を経て宣伝雑誌の編集者になり、ぼくは結婚して妻に死なれ……つまり二十年もの歳月が流れたのに小栗の癖は相変らず昔のままで、子供がいなことをこうして祝福し、妻の死をこうして慰めてくれる。そのことはぼくの感傷を誘ったのである。

「精進しょうじん落しのつもりだったんだが、何しろあの連中が飛びこんで来て……」

と小栗は、そこまでは伏目くまがちにお悔みの口調で言つて、そこからさきはじつとぼくの眼を見ながら、おどけて、

「かえって、よかったかな？」

「いいに決ってるさ、男二人で飲むより」

とにぎやかに答えると、小栗はいっそう陽気になってつづけた。

「おい、ユカリが君に気があるぞ。さっきから見ると、どうもそうだ。あれはモデルを上中下に分けると、大体、中の上か、まあとにかく、中くらいだね。マヨもそのへんなんだが。一つどうです？ 小当りにでも、大当りにでも、当ってみたら」

「そうかい？」

「ぼくの眼に狂いはないさ。たしか、どこかの大学教授の娘だ。フランス文学か農業経済……」

「おいおい、ボードレールと農協じゃあ、ずいぶん違うじゃないか」

その問題には自信がないらしく、小栗はまた父親から娘に戻って、マヨというのはもちろん本名ではなく芸名だけれども、ユカリのほうは平仮名のゆかりを片仮名にしただけだと言ってから、

「よくは知らないけど、一人でアパートに住んでるらしいや。顔もちょっといいし、スタイルもいい。声が落ちるな。天、二物を与えず……」

「あの声はなかなかいいですよ。草花みたいな感じの女の子が、低くてハスキーな声を出すのが魅力がある」

「いやに褒めるじゃないか」

「いやにけなすじゃないか」

二人の中年者が笑い声を立てたとき、化粧を直した娘たちが帰って来た。

「ほう、お色直しだね」